

# 平成31年度中学入試

## [後期 入試]

### 国語科 問題

#### 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この問題冊子は、表紙を含めて16ページあります。  
  
試験中に、印刷がはっきりしなかったり、ページの乱れや抜け落ちに気づいたりした場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
3. 解答用紙は別に配布されます。解答はすべてその解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は下書きなどに利用してよろしいが、どのページも切り離してはいけません。

[後期 入試] 受験番号\_\_\_\_\_

金蘭千里中学校

① ジュリアはニューヨークで父（ニック）と母（リサ）と暮らす少女である。一家はある日、現代的な芸術（モダン・アート）を収集、展示している「ニューヨーク近代美術館」（通称「MOMA」）へ行くことになる。次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

その頃、①MOMAは、五十三丁目の（注1）瀟洒なタウンハウスにあった。四階建ての建物に、展示室、館長室、会議室、スタッフルームなどが詰め込まれていた。

展示室の内装は、とてもユニークなものだった。白い壁、白い天井、床はモザイクのように細かい石を敷き詰めていた。ただ、それだけの素っ気ないものだった。それが人々を（注2）瞠目させ、強い関心を引く要素の一つにもなっていた。

②それまでの美術館の展示室といえば、壁は赤や紺や深緑に塗られ、天井や柱のいたるところにコリント式の装飾が施され、床には絨毯が敷き詰められたり、本物のモザイクで飾られたりしていた。そこに巨大な歴史画だとか、宗教画だとか、風景画や王侯貴族の肖像画などがところ狭しと飾られる——完全にヨーロッパスタイルを模倣したものだとし、理事会名簿に名を連ねる金持ちの趣味に合うように作られていた。

その点、MOMAは違った。装飾過多の内装は「モダン・アートの展示には向かない」として、一切の装飾を剥ぎ取った展示室を作った。確かに、白い壁は、（注3）前衛芸術のシンプルなもの（注4）フォルムや力強い表現をよく引き立てた。「なんだこりゃ」と人々が（X）をひそめるような、見たこともないような造形であつても、すっきりと美しく際立つのだ。

よくわからないけど、いいかもしれない。

MOMAを訪れた人々は、物珍しい芸術を見た、というあくウフンのうちに、まんまと美術館のトリックにはまるのだった。

ジュリアたち親子三人は、美術館が入っているタウンハウスに到着した。入り口には長蛇の列ができていた。入り口のドアには（注5）バナーが下がっていた。（注6）「マシン・アート」。ジュリアのその後の運命を決定づけた展覧会のタイトルが、風に翻っていた。

それは、③世界の美術館の歴史を変えた出来事だったに違いない。機械が、正確に言えば機械の部品が、芸術作品として、展示室に並べられたのだから。

ニューヨーク・タイムズほか、各新聞雑誌がこの展覧会を大きく取り上げ、また、展覧会を告知するトクイなポスターが街角や駅の構内のあちこちに貼り出された。

道行く人々は、このポスターに目をみはった。黒地の背景、画面いっぱい浮かび上がる（注7）ボール・ベアリングの写真。そして、「ニューヨーク近代美術館 マシン・アート」の白い文字。

ついにMOMAが暴走を始めた、ベアリングなんぞのどこがアートなんだ、とA警鐘を鳴らす者もいたが、ニューヨーカーの多くは、驚くとともに、おもしろいじゃないかと好意的に受け止めた。どうして美術館でマシンの展示会なのか、マシンがアートになったのか、それともアートがマシン化したのかと、人々は興味津々で、B大挙して五十三丁目に向かったのだった。

「まったく、ニューヨーカーっていうのは、人一倍好奇心が強い生き物だな」  
入場の列に並びながら、ニックが言った。

「ポール・ベアリングやらコイルやらを見るのに、こうして並んで、安くない入場料も払うんだからね」  
「私たちもその生き物の一部よ」リサが、笑って返した。

ジュリアは、よくわからないものの、人々の顔がなんとなくわくわくして輝いているのが楽しく、自分もその人々の列の中にいることが、うれしかった。

「ねえママ、この建物の中にはおもしろいものがあるの？」

ジュリアが訊くと、母は「ええ、まあ、そうね。おもしろいもの……」と、ちよつと返答に（注8）窮して、

「おもしろいか、おもしろくないかは、誰かに言われて決めるんじゃないよ。見た人が自分で決めていいのよ。だから、見たあとで、おもしろかったかどうか、ママに教えてね。ジュリア」

そんなふうに言った。

ジュリアは、うん、とうなずいた。

ようよう館内に入った三人は、さつそく「マシン・アート」の展示室へ向かった。室内に一歩足を踏み入れて、ジュリアは、「う、わ、あ」と思わず声を上げた。

真っ白い室内には、さまざまなマシン、パーツが展示されてあった。コイル、プロペラ、パイプ——銀色の球体、黒光りする波状のもの、すらりとまつすぐな棒、摩訶不思議な形状の何か——それらが、eセイゼンと、秩序を持って、かつリズムミカルに、まるで前衛的なオブジェのように飾られている。それらの前で、腕組みをしてしげしげと眺める人、よくわからないというふうには頭を左右に振る人、顔をぎりぎりまで近づけて見入る人、さまざまな人々が、真剣に、複雑な表情で、また楽しそうに過ごしているのだった。

ジュリアはといえば、たちまち夢中になった。どの④「アート」も、彼女にとっては、生まれて初めて見るものだった。床から天井まで届く大きなコイルを見上げ、タイヤのホイール・キャップに自分の顔をdウツして、ひとつひとつ、食い入るようにみつめた。中でも、ポスターにもなっていたポール・ベアリングに強く引き込まれた。

一九〇七年にSKFインダストリーズという会社が作ったスチール製のそれは、幅四センチ、eチヨツケイ二十一センチのホイール状のもの

ので、ホイールの中には銀色のボールが十五個、埋め込まれている。ジュリアは、ポスターを見たときから、その造形に興味を持っていた。実際に本物を見てみると、思ったよりも小さく、両手で持ち上げられるように感じた。けれど、触れてはいけなないと、もちろんわかっていた。「ベアリング……ふむ、これがベアリングか。初めて見たな」

じつとみつめて離れない娘の背後に立って、ニックがひとり言のようにつぶやいた。

「これはね、ジュリア、ええと、これは……なありサ、何の役に立つものなんだっけ？」

傍らのリサは、さあ、と（Ｙ）をすくめた。父も母も、そこに展示してあるものが、いったい何の役に立つものか、ほとんど娘に教えることができなかった。⑤それでも、ジュリアは満足だった。両親があきれるほど長い時間を展示室で過ごし、ようやく出口へと向かったのだ。

（中略——美術館の出口で館長に出会い、ジュリア一家は声をかけられる——）

思いがけず館長に声をかけられたのがよほどうれしかったのか、リサも顔を上気させていた。館長は、ジュリアの目の前にしゃがむと、彼女の顔をのぞき込んだ。

「君の名前は？ お嬢さん」

銀縁眼鏡の奥の優しい瞳をみつめ返して、ジュリアは答えた。

「ジュリア。あなたは？」

「僕は、アルフレッド。MOMAに来てくれてありがとう。展覧会はおもしろかったかい？」

⑥ 「うん」ジュリアは、少しはにかんで、けれどもはっきりと言った。「すごく」

「ひとつ、教えてくれるかな。君の好きな『マシン』は、どれだい？」

ジュリアは、目を輝かせて、すぐさま答えた。

「私の好きな『マシン』は、ベアリングよ」

「そうかい。どうして？」

うーん、とジュリアは、小（Ｚ）を傾けて、

「きれいだから」

アルフレッドは、いつそう笑顔になって、ジュリアの頭をそつと撫でた。そして言った。

「ここにあるものはね、ジュリア。僕たちが知らないところで、僕たちの生活の役に立っているものなんだ。それでいて、美しい。それって、すごいことだと思わないかい？」

「すごい」とジュリアは、素直に答えた。アルフレッドは、少女をみつめて、  
「僕は、そういうものを『アート』と呼んでいるよ」

見えないところで、役に立っていて、美しい。

MOMA初代館長⑦アルフレッド・バーの言葉は、八歳のジュリアの胸に響いた。そして、長い余韻となつて、いつまでも彼女の中に残つたのだった。

(原田マハ「私の好きなマシン」より 一部改めたところがある)

(注1) 瀟洒な……すつきりして、しゃれている様子。

(注2) 瞠目……驚いたり、感心したりして目を見はるること。

(注3) 前衛芸術……時代に先駆けて新しいものを追求する芸術。

(注4) フォルム……形や形式。フォーム。

(注5) バナー……旗。横断幕。

(注6) 「マシン・アート」……機械や機械の部品を芸術品(アート)として展示したもの。

(注7) ボール・ベアリング……機械部品の一つの名前。

(注8) 窮して……困りきって。

(一) 波線部 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

a コウフン      b トクイ      c セイゼン      d ウツ(して)      e チョツケイ

(二) 傍線部①「MOMA」とあるが、美術館としてのMOMAは、傍線部②「それまでの美術館」とどのような違いがあるか、それを説明した以下の文の空欄を、本文中の言葉を使いながら、二十字以内で補いなさい。(句読点も含む)

「それまでの美術館」は、展示室の壁を赤や紺や深緑色に塗り、装飾過多の内装であるのに対し、「MOMA」は、モダン・アートを展示するため、「二十字以内」という違い。

(三) 空欄 (X) く (Z) にあてはまる言葉として、もっとも適切なものを次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

(同じものをくり返し使ってはいけない)

ア 肩かた      イ 首      ウ 鼻      エ 眉まゆ      オ 目

(四) 傍線部③「世界の美術館の歴史を変えた出来事だった」とあるが、それはなぜか、もっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「マシン・アート」は、列ができるほど多くの人が訪れたから。

イ ヨーロッパスタイルを模倣し、マシンの一部を展示したから。

ウ 各新聞雑誌が「マシン・アート」を大きく取り上げたから。

エ マシンの一部にすぎないものが、芸術作品として扱あつかわれたから。

(五) 二重傍線部 A・B の意味と同じ意味をあらわすものとして、もっとも適切なものを次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

A 警鐘を鳴らす

ア 意識する      イ 運動する      ウ 相談する      エ 注意する

B 大挙して

ア ぞろぞろと      イ ふうふうと      ウ ぼつぼつと      エ わくわくと

(六) 「マシン・アート」の展覧会を訪れた人々について説明したものととして、もつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「マシン・アート」はめずらしい試みであったため、多くの人々は否定的であった。

イ 人々は好奇心が強く、機械の部品を見るために、高価とも思われる入場料を払った。

ウ 「ボール・ベアリング」の美しさに圧倒され、訪れた人々は皆、展示を心から楽しんだ。

エ 人々の中には、展示品の真の価値を理解できた者より、できなかった者の方が多かった。

(七) 傍線部④「アート」とあるが、これはどのようなものだと述べられているか、「もの」に続く形で本文中から、二十字で抜き出しなさい。(句読点も含む)

(八) 傍線部⑤「それでも、ジュリアは満足だった」とあるが、その理由を五十字以内で説明しなさい。(句読点も含む)

(九) 傍線部⑥「うん」ジュリアは、少しはにかんで、けれどもはっきりと言った。「すごく」とあるが、ジュリアがこのように答えたのはなぜか、もつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 初対面の相手と話すことに照れながらも、展示品を見た正直な感想を伝えようとしたから。

イ 初対面の相手と話すことをいやがりながらも、側にいる両親を喜ばせようと思ったから。

ウ えらい人と話すことに緊張しながらも、しっかりした子だと思われようとしたから。

エ えらい人と話すことにかしこまりながらも、自分の声が聞こえるように気をつかったから。

(十) 傍線部⑦「アルフレッド・バーの言葉は八歳のジュリアの胸に響いた」とあるが、それはなぜか、もっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 館長は、展示品がそれぞれどう役立っているのか、説明してくれたから。
- イ ジュリアはまだ幼いので、館長の言葉や説明を受け止める素直さがあつたから。
- ウ 館長のおかげで、ジュリアは展示品のすこさをより深く感じられたから。
- エ 館長によって、ジュリアは展示品の美しさに気づくことができたから。

② 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

今日は、君たちがこれからの長い人生を生きていく上で、ぜひ身に付けてつけてもらいたい「独学する心」というものについて、話をしたいと思う。独学とは、だれかについて何かを教えてもらうのではなく、自分の力で学問をし、何かを得ること、生み出すことである。では、独学する心とは、どのようなものなのか。それを持つことで、どういった生き方が開けてくるのだろうか。

独学する心は、学問や読書にだけあるのではもちろんない。およそ人が生きるために学ぶ行為の中では、いつも必要とされているものではないだろうか。例えば、私が去年知り合った大工さんは①独学の権化のような人だ。自分の家を改築したときに、この人に来てもらった。歳は当時六十五歳だった。名前は高橋茂さん、大工としての腕もとびきりだが、生きる姿もすばらしい。

高橋さんが子どもだったころは集団就職の全盛期。この人は中学卒業後に埼玉へ出て、大工の親方に弟子入りをした。そこで一番つらかったのは、「自分が何をすればいいか、だれも言ってくれなかったこと」だったそうだ。働きに出て、何をしたらいいかわからないほどつらいことはない。中学を出て親元から離れたばかりの子どもだから、さぞつらかっただろう。

でも、現場にしばらく通って行くうちに、自分が何をすればいいかだんだんとわかってきた。そうすると、親方と自分との差というものが、おのずと見えてくる。親方の（注1）鉋から出る削りくずを見て、びっくりする。「どうやったらこんなaグアイに削れるんだろうか」と考える。夜、みんなの仕事が終わり、後片付けもすませてから、一人で鉋を手にとつて不要な木材を削ってみる。見よう見まねだ。そうするうちに仕事だんだんと面白くなってきたという。

ここで君たちに考えてもらいたいのは、②なぜ、親方は高橋さんに何も教えなかったのか？ ということである。もちろん、意地悪をしているのでも、技術を隠しているわけでもない。口で教えることで死んでしまう技が大工の技だからだ。言葉で教えられたものは、すぐに忘れてしまう。それはただの知識だから。自分の体を使って発見したものは忘れない。そういうものは知識じゃなく、身についた自分の技になっている。

人間の体は、手も足も③一人ひとり違う。大工が木を削るにしても、そのときの感覚、高橋さんの言葉では「勘」は人によって異なる。木と体と鉋、この三つの間にできる関係は、一〇〇人いたら一〇〇通りある。これを口先で教える方法は絶対でない。これは職人ならだれでも知っていることだろう。だから各々が独自に身につける必要がある。自分なりに④あれこれと取り組んでみて、わかる以外にはない。それから大工というものは、自分の扱木がどう育ってきて、これからどういうふうに変化するか、どう反つて、どうもチヂむか、木を持っただけでじかに感じられるようになる。でないと、生きたいくつもの木をどう組み合わせたらいいかわからない。

ところが、電気鉋しか使わない現代の大工さんは、もうそうした感覚を失っている。感覚なしでも、機械が全部やってくれるから。それから（注2）無垢

の木を扱うことがほとんどなくなった。工業製品の合板は、死んでいて、変化しない。部品として組み立てるだけでいい。これじゃ、⑤木を読むなんて技が育つわけがない。鉋をかける技もなく、木を読むことのできない人工は、高橋さんのような職人からするともう人工とは言えない。建設会社の社員である。

もちろん、これは人工の世界に限らない。近代以降、人間が自然を相手に身につけてきた大切な技はどんどん失われてきた。私たちは、機械の便利さに慣れ切って、身ひとつの「勘」でしか磨かれぬ技を持ってなくなってきた。独学する心は、ここでも失われてしまった。

話は変わるけれども、昔の（注3）儒学では「⑥天を敬する」ということが一番重んじられた。「天」は神さまのことだといってもいい。もつとも深い意味での「自然」のことだと言ってもいい。身ひとつで独学する心は、おのずと「天」に通じている。「天」が助けてくれなければ、独学は実を結ばない。

人は自然に逆らっては何もできない。大工の高橋さんにしても、すべては生きた木との相談ずくでしか仕事はできない。木の命に入りこみ、木に協力してもらうのだ。これは学問でも同じである。対象への愛情がないところに学問というものは育たないと私は思う。対象を愛する気持ちには、結局は「天を敬する」気持ちから来る。神さまに従うように自然のありように慎重に従う。

西洋の近代とは、自然を科学の力でねじ伏せようとしてきた時代ではないか。むしろ、そんなことはできないのだが、できる気になってしまっている。科学は、あらゆるものを数の関係に置き換えて、（物に有用に働きかける）ことを目的にしている。つまり、自分の都合に合わせて、自然を利用するわけだ。だから、物にも自然にも、おのずと愛情や敬意を持たなくなる。口では持っているようなことも言うが、物とつき合う体も技も欠いているのだから、愛情は育ちようがない。

建築もそうで、工業生産品を組み立ててつくる建物は、全部数学的な関係を当てはめて考えられたものだ。それを考える人を建築士というのだが、建築士は図面を引くだけで、木にも石にもじかに触れるということがない。触れたって、そこから何かをつかむ技を持っていない。何でも数の上の計算で済ませる。この計算がどんなに高いビルをどれほど建てたかはだれでも知っている。でも、そういうやり方に、人間が自然の中で、言い換えると天のもとで生きる知恵というものがあるだろうか。これがないと人類は大変なことになってしまう。

これは、高橋さんに聞いた話だが、大工と建築士の間では、柱一本立てるのにもたびたび意見が食い違ふ。知識と計算で物事を考える人と、身ひとつの勘と技で仕事をする人とはそうなるだろう。それから、高橋さんはこんなことも言う。「仕事にはできることとできぬことがある。素人はそこるところがわからねえから困るんだ」と。できないことがあるのは、自然が与えるものの性質に従っているからである。もし、できないことがなくなったら、仕事は成り立たなくなる。水のないプールでは泳げないようなものだ。建築士はそうは考えない。できないことは、そのうち科学技術の進歩で可能になる、できないことを放っておくのは恥だと思っている。私たち素人もだいたいそういう考えでいる。これじゃ、人間に大事なことが、何もわ

からなくなるのではないか。

学問でも本当は同じである。考えられないことがあるということは、学問が可能になるための大切なcジヨウケンである。我が身を離れた空想はいくらでもできる。が、それは空想でしかない。学問はしつかりとした対象を持たなくてはならない。その対象の性質にうまく、深く入り込まなくてはならない。身ひとつ、心ひとつで入り込む。その中でできることがどんなにわずかなことか、本当の学問で苦勞した人は、みんな知っている。社会に出て担う仕事も、多くはそうなのではないだろうか。ただ、科学技術の發達に目を奪われて、たくさんの方がこのごく当たり前のことを忘れているように思う。

最後にこういう話をしよう。孔子の教えを記録した『論語』には、こんな話がある。あるとき、弟子が孔子に尋ねた。君子の持つべき心境とは、どのようなものでしょうかと。君子というのは、知恵のある正々堂々とした人のことだ。これに対して孔子は言った。「君子は憂えず懼れず」であると。弟子にはdイガイな答えだった。そんな人、馬鹿じゃないかと思つたのだろう。一体どうしてですか、もう一度聞くと、孔子は次のように答えた。「身に省みて」恥じることがないなら、何も心配したり恐れたりすることはないと。

いい言葉じゃないか。人間はこれでいいのだ。恥じるのは、身ひとつの自分の力を偽っているからだろう。わかりもしないことを、わかつたように見せかけたりして。するといろんなことが心配で、怖くてたまらなくなる。そこでまた嘘をつく。「身を省みる」とは、身ひとつの自分にいつも誠実に素直に帰つてみるということだろう。だから、君子の学問は、いつも独学なのである。

(前田英樹「独学の精神」より 一部改めたところがある)

(注1) 鉋……木の表面を削って平らにする人工道具。

(注2) 無垢……ここでは自然のままに加工していないという意味。

(注3) 儒学……孔子(中国の古代の思想家)の教えを中心とする伝統的道德思想。

(一) 波線部 a、d のカタカナを漢字に直しなさい。

a グアイ      b チヂ(む)      c ジョウケン      d イガイ



(八) 筆者の言う「大工」と「建築士」の違いを正しく説明しているものを、次のア～オの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 大工は厳しい修業を積んで、勘や技を身につけた人であるのに対し、建築士は大工になれずに、建設会社の一社員で終わった人である。

イ 大工は生きた木に直接触れて、木の性質に従おうとする人であるのに対し、建築士は知識と計算を使って、図面の上で考える人である。

ウ 大工は工業製品の合板を使っても、意のままに木を扱える人であるのに対し、建築士は自分の都合に合わせて木を利用する人である。

エ 大工は「天を敬する」ために木を大切に作る人であるのに対し、建築士は立派な建物を建てるために役立つ木だけを愛する人である。

オ 大工は鉋をかける技を磨いてひとり立ちしていく人であるのに対し、建築士は電気鉋のような機械に仕事を全部任せてしまう人である。

(九) 本文の内容について次のようにまとめた。空欄【 1 】～【 4 】に入る適切な語句を本文から見つけ、指定された文字数で抜き出さなさい。

科学技術の進歩は、人間にできないことはないと思わせるようになった。しかし、それは大きな誤りで、人間は【 1 十四字 】  
ということ忘れてはいけないと筆者は指摘する。人間一人の力には限界があることを自覚していれば、【 2 十六字 】  
必要はない。孔子の言う「君子」は身に「恥じること」がないというのは、そのような自覚を持っているからだろう。だから、君子  
はできないことを心配したり、わからないことを恐れたりすることなく、【 3 四字 】としていられるのだ。

このように考えていくと、筆者の述べる「独学の心」というのは、自分の力を実際以上によく見られようとしてうわべを飾ることをせず、【 4 七字 】に帰って学問することなのである。

【問題は以上で終わりです】

①	(二)	a	「それまでの美術館」は、展示室の壁を赤や紺や深緑色に塗り、		(二)	装飾過多の内装であるのに対し、「MOMA」は、モダン・アートを展示するため、		と違う違い。	(三)	X	Y	Z	(四)	もの。	(七)	(八)	(九)
		b	B	(六)		(十)											

②	(二)	a	b	(む)	c	d	(三)	親方は	と考えたから。	(四)	(五)	錯誤	(六)	(七)	(i)	(ii)	(iii)	(八)	(九)	1	2	3	4

得点	
受験番号	

# 後期 解答 国語

①

- (一) a 興奮 b 特異 c 整然 d 映して e 直径  
②×5
- (二) 壁を白色に塗り、素っ気ない内装である(18字)  
⑥
- (三) X エ Y ア Z イ  
②×3
- (四) エ  
④
- (五) A エ B ア  
③×2
- (六) イ  
④
- (七) 見えないところで、役に立っていて、美しい(もの)。  
⑥
- (八) 展示してあるものが何の役に立つのか分からなくても、ジュリアはそれらを「きれい」だと思ったから。(46字)  
④
- (九) ア  
④
- (十) ウ  
④

②

- (一) a 具合 b 縮む c 条件 d 意外  
②×4
- (二) エ  
③
- (三) (親方は)言葉で教えられたものはすぐ忘れてしまうが、自分の体を使って発見したものは忘れることもなく、身についた自分の技となる(と考えたから)。(58字)  
⑫
- (四) 十人十色・千差万別 など  
③
- (五) 試行(錯誤)  
③
- (六) それから大工と  
⑤
- (七) (i) うやまう (ii) ひとり (iii) きづく  
②×3
- (八) イ  
④
- (九) 1 自然に逆らっては何もできない 2 できないことを放っておくのは恥だ  
④×4
- 3 正々堂々 4 身ひとつの自分  
④×4